

*A Natural Curiosity*における家族の絆

Family Ties in *A Natural Curiosity*

(1991年4月3日受理)

森元洋子
Yōko Morimoto

Key words: Margaret Drabble, family ties

マーガレット・ドラブル (Margaret Drabble) は日本でも馴染み深い『礪石』 (*The Millstone*, 1966) をはじめとして、母性とアイデンティティ、母性とキャリアの相克を描いた一連の作品を60年代から70年代にかけて世に送り出し、現代英国作家を代表する存在となっただけでなく、フェミニズム運動にも色濃く影響を及ぼしている。ケンブリッジ大学在籍中、Simone de Beauvoirの『第二の性』 (*The Second Sex*) と出会い影響を受ける。ドラブル自身の個人的体験 (二度の結婚, 三人の子供の育児, 仕事) と相俟って、ポーボワールの影響は若いドラブルに大きく作用したことがうかがえる。『第二の性』の影響について、彼女はインタビューで次のように語っている。

This seemed to me to be wonderful material and so important to me as a person. It was material that nobody had used and I could use and nobody had ever used as far as I would use it.⁽¹⁾

しかし、1980年に出版された *The Middle Ground* を最後に、ドラブルは一時創作活動を停止する。10年近い沈黙の後、彼女は再び势力的に活動を開始する。三部作構成から成る *The Radiant Way* (1987)、*A Natural Curiosity* (1989) が立て続けに発表され、現在はその完結編を執筆中であり、近々第三部が発表される予定であると聞く。三部作中既刊の二作品は、今までのドラブルの中心的視座であった女性であることの状況から離れ、新たな視座である英国社会が抱えている種々の社会問題へと移っているように思われる。もちろん初期の作品においても女性の私生活を詳細に描くことで、現代社会が抱えている問題を明らかにしようとする作家の意図は十分実現されていることは言うまでもない。題材が私的なものからグローバルなものへと移っていることについて、ドラブル自身、人は成長するにつれて、その生活にも幅が出てくるものであり、小説はそのような人間の生き方を反映したものである⁽²⁾と述べ、テーマの喪失ではなくむしろ獲得である⁽³⁾と結論づけている。

奇しくも現代英国文学を代表する二人の作家、ドラブルとマードック (Iris Murdoch) が共に性差を超越し、その視点を広く社会に求めようとしていることは、80年代以降の英国社会の激変が、いかに深い危惧を両作家の心に与えているかの証左と言えよう。両者とも文学という鏡を通して、読者に対し社会を映し出すことを文学者の使命と考え、より良き社会、あるべき人間の姿を模索し続けている。しか

しながら両者は、手法においていくつかの隔たりが見受けられる。ドラブルは性差はそれほど重要な問題ではないとしながらも、マードックほど男性心理の深層に踏み込むことはできない、また、敢えてそうしようとはしない。ドラブルはあくまで女性の目を通し社会を描く手法を捨てようとはしない。作中の女性たちが、性差を超越した深い認識に至るように成長していくのである。特に、*A Natural Curiosity*においてはそうである。哲学教師出身のマードックの作品がややもすると、教条的、理念的に過ぎるとの批判を受けるのに対して、ドラブルは現代社会をドキュメンタリー風に描き上げることに長けている。自らも、完全を求め過ぎてはいけなく、作品に妥当性があるかどうか重要なことである⁽⁴⁾と語っているように、鳥瞰的に時代の実相を映し出すことの方に彼女の関心は向けられており、答えは専ら読者に委ねられている。*The Radiant Way*, *A Natural Curiosity*の二作品の結末がともに、クライマックスを迎えずに終息している所以である。ドラブルは時には自らが作中に顔を覗かせ、読者に問い続けることを止めない。

*The Radiant Way*では、三人の女性たちを中心に、現代の英国社会が抱えている様々な社会問題が提示される。親子、夫婦、離婚、失業、殺人などに関する出来事が三人の周辺で次々と起こる。*A Natural Curiosity*も前作同様、三人の女性たちを中心に殺人、民族差別、子供の性の問題、核問題、マスメディアの横暴などが鳥瞰的に描かれている。しかし、その根底にはやはりドラブルの長年のテーマである「家族」の問題が在る。小文においては、作中人物たちの家族の絆を中心にドラブルが求めんとする人間関係の在り様について考えたい。ドラブルは、家族とはその抽象的、自然的力を前にしてひれ伏すべき人間存在の状態である⁽⁵⁾と考えている。登場人物の多くは初め家族のつながりを否定しようとするが、最終的には家族へ帰属していく。家族への愛情ある回帰が、社会の一員として目覚めることにつながる。しかし、80年代の英国社会はある批評家が言うように、この様な家族の絶対性を不可能とし、イデオロギー上にしか存在し得ないものとしている⁽⁶⁾のであろうか。現代社会における家族の絆を中心に本作品を考えたい。

*A Natural Curiosity*の中心をなす三人の女性(Liz, Alix, Esther)はともに50代前半、オックスフォードの同級生で、彼女たちの友情の絆は大学卒業後も途切れることなく続いている。三人ともにキャリアを持っているが、私生活に於いては独自の道を歩んでいる。舞台は前作のロンドンからヨークシャーのノーサムという田舎町に移る。このノーサムという架空の街は、ドラブルの生地シェフィールドを念頭に置いて描かれたそうである。ノーサムはリズの生まれ故郷であり、アリックスの夫ブライアンの生まれ故郷でもある。ロンドンで職を失ったブライアンは、アリックスを伴いノーサムに居を移す。一方、家族の暗い過去を疎ましく思うリズは、母親と妹のシャーリーを残したまま、自らは故郷に帰ることはほとんどない生き方を長年してきたが、母親の死とシャーリーの夫クリフの自殺が、彼女をノーサムに向かわせることとなる。

ピューリタンの風潮が根強く残る北部産業地帯に位置するノーサムでは、現実に絶望し、現実と妥協し、妻にも母にも徹しきれず、かと言って職業人として生きる能力も気力も持てない中年にさしかかった女たちが、自らのアイデンティティを握ろうとあがいている。リズの妹シャーリーもその様な女たちの一人である。シャーリーの夫クリフはある日突然、一通の遺書も残さず自殺してしまう。事業が行き詰まっていたということ以外、原因さえもシャーリーにはわからない。夫の死の第一発見者となったシャーリーは、悲しみよりも憤りに近い感情を抱く。故郷に引き寄せられるリズに対して、意に適わぬ

まま故郷と家族に縛られていたシャーリーは夫の死によって、故郷と家庭を捨て未知の世界へと旅立つ。シャーリーの出奔は、夫の悲劇的な死で精神錯乱の状態に陥ったというより、それまで夫を通してしか世の中を見ていなかったシャーリーが、自らの目で世の中を見、自己を確立していくための試練と考えたい。「夫クリフの死は、シャーリーに嘆きよりも怒りを抱かせる (“She was quite angry with Cliff.”)」(7)「それまで現実と妥協することでもかろうじて抑えてきた「様々な想い (“A loneliness, an oppression, a desire to escape, a craving for the normal.”)」(NC p. 118) が一気に噴出し、彼女はどのようなのか、どうしたいのか判らぬまま車を南へと走らせる。

Human nature, since Cliff's death, has gone soft and shapeless, has melted into an amorphous mass, an unpredictable uncorseted lump of matter. (NC p. 118)

シャーリーの行動は一見無軌道で突発的な行為のように映るが、彼女もやはり姉リズ同様、故郷や家族と切り放された所にこそ自己充足の場があるのだと思込んでいるのではないだろうか。姉妹の両親の暗い過去はリズのみならずシャーリーにとっても重荷であったのだ。ドラブルは、理想と現実の間にはギャップが在ると知りつつも、我々は充足を求めて駆り立てられる⁽⁸⁾と語っているように、シャーリーも駆り立てられずにはいられない類の人間であろう。もちろん、現実のシャーリーは夫の死を冷静に受け止めることも出来ず、自分の行動を客観視し得ているわけでもない。ただ心の中に潜む漠然としたものが、彼女を南に向かわせているに過ぎない。

At the back of her mind, she has a vague plan. She herself does not know what it is, but it is forming itself, in the obscurity. It has no shape, no features, it has merely a mood, a colouring, like a forgotten dream. It pulls her southwards... (NC p. 126)

シャーリーが偶然にも取った道はケント、カンタベリーに通ずる道すなわち、「巡礼の道 (“the Pilgrim's Way”）」(NC p. 127) であった。このことは説明のつかない「好奇心」に衝き動かされた旅の行く末を暗示するものではなかろうか。ドラブルの作中人物はよく旅をする。彼女たちにとって旅は未知への体験の予感、未知の自分の発見の予感に溢れている。ドラブルは旅のイメージを借りて、好奇心を燃やし、緊張して生きることが大切なのだというメッセージを送っている。*Jerusalem the Golden* (1967) の主人公クララにとって旅は、新天地を求める聖地巡礼者の出国のように、人生における決定的瞬間⁽⁹⁾であり、主人公を縛っていた鎖を解き放ち、精神の自由をもたらす象徴として描かれている。

As the train pulled out of the station, she watched the black and ridged and hard receding buttressed walls, travelling through their narrow channel into some brighter birth, and into some less obstinately alien world.⁽¹⁰⁾

旅の果てに待ち受けているものはさほど重要ではなく、好奇心を持ち続ける状態が重要視されている。あらゆる好奇心が我々を善あるいは幸福に導くとは限らない、破滅に至らせる好奇心も多いであろう。たとえ破滅に至ろうとも好奇心を燃やすことのない人生は、惨めなものである。ドラブルの短編 “A

"Voyage of Cythera" (1967) には旅のイメージを借りて、好奇心を抱き続けること自体の重要性が効果的に描かれている。

She always felt that the sea might lie beyond such rising nothingness, and sometimes it was the sea, but more often it was the Caledonian Market or a row of Hampstead houses: though whatever it was somehow irrelevant, for it was that tense moment of expectation before revelation that she so much cherished.⁽¹¹⁾

シャーリーの旅は、上記の若い主人公たちのように、未知への期待に溢れてはいないが、少なくとも彼女も他の主人公たち同様「もっともらしい世界から、未知の世界へと踏み出した("Shirley has stepped out of plausibility, into the unknown.")」(NC p. 141) ことに違いはない。ところがさ迷えるシャーリーは、ドーバー海峡を渡る船上で隣合わせた男性と、わりない仲になってしまう。作者自らが、半ば呆れながら「死の真只中にいてさえ、我々は生きている ("In the midst of death, we are in life.")」(NC p. 142) と漏らしているように、ドラブルの女性たちは苦境を笑い飛ばす力を備えている。悲劇を喜劇に転じさせてしまうようなこの場面は、現実からかけ離れた世界に浸っていたシャーリーを見事に日常の世界に引きずり戻す効果を生んでいる。我々の人生は、平凡な日常の繰り返しに過ぎないが、繰り返す日常の中にこそ悲しみ、喜び、苦しみ、憎しみ、幸福等々が存在しており、我々の日常は悲しみや喜びで同時に彩られているのだ、砥澄ました観念だけでは成り立っていないのだということを教えてくれる。

見ず知らずの男に身の上話をし、胸ときめかすシャーリーは「こんなことが自分の求めていたことなのか ("Is this what she wants, what she has come to seek?")」(NC p. 151) と反撥しつつも、彼女の話を親身になって聞いてくれる男ロバートに強く引かれていく。夫を失ったばかりの妻の取る行動としては、あまりにも軽率で不謹慎であると思わせるシャーリーの行動ではあるが、突飛さゆえに、今までの彼女の生活がいかなるものであったかが強く浮き上がってくる。今だに古い伝統が色濃く残るノーサムで、女として生きたいと願いつつも家事に明け暮れ、いくら年月を重ねても夫婦としての心安らぐ絆を感じる事もない日々、壁に取り囲まれ、壁に向かって言葉を発しているような日々、失望と諦めがシャーリーの生活である。ロバートと話すとき、「人間が彼女に話しかけている」という思いを抱くところに、彼女の今までの生活が集約されている。

A human being is speaking to her. She has been locked into solitude for years, for a decade at least. (NC p. 153)

シャーリーは形式的な夫婦関係を求めたのではなく、真の人間的な触れ合いを求めていた。しかし、シャーリーが願う関係が二人の間に成立する前に、クリフは自らの命を絶ってしまった。シャーリーはこのような形で突然、夫婦のそして家族の絆が切れてしまうことを受け入れることができなかったのではないか。それが彼女を逃避行という発作的な行動に向かわせたのではないだろうか。ロバートの存在は、シャーリーとクリフの関係がどのようなものであったかをシャーリーに衝撃的に悟らせてしまう。瞬間の体験で、人は悟ってしまうこともあるのだ。

……she had been living with Cliff as with a stranger, had been taking care of him as though he were a stranger, had been dreading, foreseeing, from a distance, the inevitable collapse. Robert is companionable, easy. (NC p. 158)

ロバートはクリフの死とシャーリーの逃避行をあまり神秘化し過ぎて考えず、単なる現実として受け入れた方がよいと助言する。彼自身、恋人に裏切られたばかりであり、二人はロバートが恋人と過ごしていたパリのアパートで性に浸りきった日々を過ごす。実は、シャーリーの結婚生活は決して貞淑なだけの妻ではなかった。クリフの弟スティーブとの間に何度かの性的な触れ合いがあった。結婚後何年か経って偶然のように、二人は関係を持つ。スティーブの「何年も君と寝たいと思っていた(“I wanted to fuck you for years.”)」(NC p. 180)という言葉はシャーリーを強く揺さぶる。

It was a word that reminded Shirley of the bad girl she had wanted to be, had believed herself to be, before she grew up and became a housewife and mother of two. (NC p. 180)

Bad girlという言葉は、自由に生きたい、自らの意志の命ずるままに生きたいとする姿を表しているのではないか。故郷を捨てキャリアの道を選んだリズに対し、シャーリーは故郷に残り母親の世話をし、父親が猥褻行為の末自殺という事情のため、人々の偏見の中で生きざるを得なかった。この様な状況下で性をはじめ、自らの生き方を自由に選択するという実存的な生き方は、シャーリーにはbad girlになることに思われたのであろう。

しかし、ドラブルはヨーロッパ的合理主義によるアイデンティティ確立⁽¹²⁾を是としない。性に浸りきった日々を送ったシャーリーは、娘時代の憧れであったbad girlになったのだ。すなわち、彼女自身の肉体のドンになり得たのである。自らの肉体を通して自己修復を行ったシャーリーは、一気に自由への道突っ走るかと思いきや、彼女はしきりにノーサムのわが家の風呂に思いっきり身体を伸ばして浸りたいという願望に捕らわれる。そして、彼女はロバートに伴われて、姉リズのもとに現れる。リズには目の前にいるシャーリーが「以前見知っていたシャーリーとは全く別人(“Liz is fascinated by this new, unknown Shirley.”)」(NC p. 242)のように映る。ノーサムに戻ったシャーリーは度々風呂に入る。

The healing bath, the regression to the womb, the salve of the wounded. (NC p. 251)

風呂に浸かるイメージは、母親の子宮への回帰につながり、さらに家族への帰属へとつながる。ここで読者は、シャーリーが心の奥で求めて止まなかったものは家族の結び付きであったのだということに思い至る。ドラブルは故郷に戻ったシャーリーが今後どの様に生きるのかについては「語っていない(“Many endings have occurred to Shirley.”)」(NC p. 251)しかし、突然姉妹の異父姉マーシャが現れ母親の過去が明らかにされる。周囲の人をすべて魅了せずにはおかない「完全無欠のイメージを備えたマーシャ(“Marcia made everything sound so normal, so unsurprising.”)」(NC p. 269)の存在は二人を虜にしていくな。

Liz Headleand also woke to a new world, a shining, guiltless world. Howard Beaver was

dead, but she was reborn. New waves of energy poured into her, her brain fizzed, her body leapt into action. (NC p. 276)

両親の暗い過去が姉妹のうえに長年覆い被り、二人にとっての家族の絆は切れたかに思われていたが、長姉マーシャの出現は家族の再生を予感させる。ドラブルは、家族は精神的、心理的慰めの場であり、家族の絆を通して我々のアイデンティティも確立していくもの⁽¹³⁾としてとらえ、家は子宮、精神の象徴⁽¹⁴⁾と考える。この様に考えると、シャーリーの逃避行も再び故郷(家族)へ戻るための心理的旅であったのかもしれない。

ドラブルは家族を単位として、人と人の結び付きの重要性を訴えている。家族の崩壊と再生を繰り返す描くことにより、作者は現代社会の混迷とそこから抜け出る手段として、時代を越えて結び付く家族の愛情の重要性を説いている。

しかし、この宿命のとも思われる血の支配から、我々は永久に逃れ得ないのであるかという思いが読者の頭をかすめる。ドラブルは、思っているほど我々は、自分たちの祖先から自由になっているわけではないと考え、個人のアイデンティティは祖先から受け継いだ特性と幼児期の環境により決定する⁽¹⁵⁾という宿命論的立場に立つ。シャーリーは辛うじて家族の再生を図るが、再生し得なかった家族の例が、アリックスが好奇心を抱く殺人犯ポールとその母親アンジェラである。ポールの「棕櫚の木は枯れているようでも、実は生きている (“That’s their *natural* look. When they look as though they are dying, they are really living.”) (NC p. 105) という言葉は、家族の有り様を暗示して興味深い。現代社会の残酷さと無関心を象徴するかのよう、種々のグロテスクなイメージがポールの周辺に描かれる。特に、度々登場する「切られた首 (a severed head)」は、最もグロテスクで絶望的なイメージである。「切られた首」は、修復不能な人間関係を象徴するものであり、絆の切れてしまった家族の悲劇をも表している。

ポールは被害者の首を切り離すという残虐なやり方で五人の若い女性を殺し、現代版切り裂きジャックと人々の好奇的となっている殺人犯である。アリックスは、ふとしたきっかけで彼が収監されている監獄を定期的に訪れるようになった。彼女をポールのもとに向かわせるのは、何故ポールがこれ程までに残虐な行為をしたのかという好奇心と、彼女自身の中にある罪の意識である。ポールを全面的に受け入れることができるならば、アリックスは長年捕らわれてきた原罪意識から抜け出すことができるのではないかと考える。

Nature and nurture. She would like to acquit Mankind, and if she can acquit P. Whitmore, then she can acquit absolutely anybody. Anybody and everybody. Nurture and nature. Alix cannot help believing in the nurture argument, as the nature argument is so *unfair*. (NC p.21)

幼児体験は、その後の人生に大きな影響を及ぼすと考えるアリックスは、ポールの過去に関心を抱く。彼の母親は、父親と15才のポールを捨て駆落ちをして以来、消息不明であり、ポールが母親を語ることもほとんどない。ポールと母親の関係は、アリックスの目を通して明らかにされていく。ポールが母親

を回想する場面が、作中に二度だけ出て来る。

古代史に関心を寄せるポールに、アリックスは古代史の本を送る。その中にあるブロンズ製の馬の首を、ポールは模写する。その馬の耳には、四角い穴が開けられており、その穴は、母親が家を出るまで経営していた美容院で、若い娘たちの耳にピアスの穴を開けていた母親の姿を連想させる。馬は英国人にとっては聖なるトーテムであり、神聖なる存在であると同時に、horsemeatからwhoresmeat(売春婦)を連想する下品な冗談にも用いられている。ポールにとっては、母親は聖なる存在であると同時に、自分を捨てて男と駆落ちした汚れた存在でもある。第二の場面は、ポールが、アリックスに母親が自宅で棕櫚の木を育てていたと語る場面である。死にかかっているように見えるが決して死んではない棕櫚の木に執着する息子と、常に切られた首のイメージを纏って登場する母親。これら二つの場面は、彼らの親子関係を見事に描写している。家族の絆を必死で求めようとする息子。切れてしまった親と子の絆、家族の結び付きが消滅した世界で生きる母親の息子に対する態度は残酷なまでの無関心である。胴体と切り離されてしまった首は、二度と命を吹き返すことはできない。

母親が育てていた棕櫚の木の話をし、棕櫚の木が「私を中に入れて、妹よ! (“Take me in, little sister, take me in, little sister.”) (NC p. 105) と泣いて訴えている夢を見たと言語するポールの様子から、アリックスはポールの意識は強く母親に向けられていると理解する。不可解な殺人鬼と噂され、殺人の動機、母親の所在についても、個人のスキャンダルを詮索しほじくり出すことに長けているマスコミは今だに何も擱んでいない。アリックスは母親を捜し出そうと決心する。棕櫚の木に執着するポールの姿は、アリックスには、母親との絆の再生を希求しているように思えたからである。棕櫚の木は「生命の木」、「誕生の木」とも呼ばれ、自己再生を表象し、聖母マリアの持ち物とされている⁽¹⁶⁾ことから、母親との再結合を願いつつも果たされず苦悩するポールの深層が垣間見えてくる。

母親の手がかりを得ようと、アリックスはポールの生まれ故郷に父親を訪ねる。生家の周辺には驚くべき数の肉屋が密集しており、彼の父親もまた肉屋を営んでいた。様々な部位の肉、内蔵が何ヤードにも渡り陳列されている様は、アリックスを圧倒する。肉と血と脂、それは「生き物の死 (“Death of man and animal.”) (NC p. 132) 以外の何物でもない。生まれて以来、おびただしい死と、母親の拒絶に囲まれて生きてきたポールは、ドラブルの宿命論的世界で生きる登場人物の典型であろう。ポールの苦悩は、人間存在の状態 (Human Condition) と深くかかわっているとの確信をアリックスは持つ。

Paul was distressing rather than frightening. He instilled sorrow, not fear. Sorrow for human suffering, for human distress, for waste, for error. (NC p. 192)

人間を理解するための要素として、彼の一族の血の絆と、幼児体験は不可欠であるとの見地に従うかのようにアリックスは「不吉な知らせをもたらす仇討の天使 (“The avenging angel with unwelcome news”)(NC p. 138) となって、母親のもとを訪ねる。アリックスの旅は、ポールに成り代わって、彼の人間再生のために必要な過去への心理的旅であった。シャーリーは自らの足でその旅をしたが、獄中のポールはアリックスにその旅を託したのである。ポールの母親は切られた首とともに、アリックスの前に姿を現す。アリックスを迎えたのは、母親の家のドアに取り付けられている女性の首の図柄のドアノブである。ポールの母親は犬の売買を仕事としており、檻に入れられた多くの犬がアリックスに吠えかかる。犬の餌にするための生肉が部屋中に吊されているのがアリックスの目に入る。異様な光景にア

リックスは悪夢を見ているように思う。“It was crazy, it was ugly.” (NC p. 200) ポールの母アンジェラは、息子に全く関心を持っておらず、母親は死んだと伝えてくれと冷たく言い放つ。アンジェラ自身が「誰からも顧みられることのない (“Nobody ever gave a thought to me.”) (NC p. 201) 人生を送っており、アンジェラの世界は人と人の結び付きが、完全に切り離された荒涼とした世界である。

様々な残酷な殺人事件、核実験が人体に及ぼす悲劇的な影響、幼児に対する性的虐待をはじめとする子どもの性被害、陰湿な人種差別、などの問題がアリックスの周囲に次々と起こり、あるいはマスコミを通じて流される。TVをはじめとするマスメディアの発達は、否応なく我々の生きている世界がコスモポリタンの社会であることに気付かせ、そのような社会においてはあらゆる問題が混成されているとの認識を持つことが、現代の危機的状況を理解する前提であると、我々の意識の覚醒を迫る。そして、この状況を脱するために必要とされているものは、人間に対する愛と理解であると、ドラブルは説いているのではないか。アンジェラのポールに対する無関心、すなわち愛と理解の欠如は現代人の不毛な人間関係を象徴するものであろう。

このアンジェラとポールの親子関係は、ドラブルが多くの作品において主張してきた、肯定的あるいは楽観的未来⁽¹⁸⁾を否定するものなのか。この問いに対する答えの半分は、息子ポールによって示され、残り半分は母親アンジェラによって示される。

……even Paul Whitmore struggles on in his darkness, after so many choices, so many damning choices, hoping for salvation, hoping for light, hoping for grace, hoping for explanation, hoping to rejoin the human race. (NC p. 195)

このポールの姿は、すべての人間が光を求めて生きんとしているのだというドラブルの人間観の表れであろう。母親のことを言い出せずにいるアリックスにポールは無邪気な様子で、父親から手紙が届いたこと、そして手紙の最後に「愛しているよ、そして神の御加護を！ (“With love, God bless”）」(NC p. 232) と書いてあったと嬉しそうに話し、アリックスに礼を言う。アリックスは深く感動し、涙を流す。そして「神の愛 (“The indiscriminate love of God”）」(NC p. 233) と許しがポールを救ってくれるのではないだろうかと期待を抱く。いかなる暗闇で苦しむ人間も、光を求めようとするのが人間の本性であり、愛と理解と許しが暗闇の世界の住人を光の世界の住人へと導くという予感を読者は抱くのであるが、その予感はアンジェラにより打ち砕かれる。前述の問いの残り半分である。

ポールのために再度アンジェラを訪問したアリックスを待ち受けていたものは、前回の訪問以上に醜悪な光景であった。犬たちを打ち捨て、アンジェラは姿を消し、檻の中では多くの犬が餓死、あるいは餓死寸前になっている。窓から部屋を覗くと、天井から馬の首が吊され、その下で犬が死んでいる。地獄絵図のような光景を目にし呆然と立ちすくむアリックスの前に、突然アンジェラが現れる。驚いたアリックスは、犬たちの糞尿の中に尻餅をついてしまう。これ以上アンジェラの「救いようのなさ (“hopelessness”）」(NC p. 281) を明らかにする出来事が他にあってだろうか。ここでもう一度、ポールが見たという棕櫚の木の夢を思い出していただきたい。「妹よ！私を中に入れて」と泣く棕櫚の木の夢である。アンジェラがこれ程までにポールを拒絶したのは、彼の妹に原因があったのだ。実はポールは双子であり、幼い頃妹が死亡したのである。アンジェラは、生き残ったポールを憎むことで悲しみを相殺しようとする心理状態に陥ったのだった。ポール自身は自分が双子であったことも、そして、妹が死んでしまっ

たことも全く覚えてはいない。しかし、この幼児体験がポールの深層に強く刻み込まれ、無意識のうちに夢となって現れたのではなかろうか。妹の存在（死）が、彼を母親から遠避けてしまったという想いが、ポールの心の襞に長年潜んでいたと解釈できないか。幼児体験がいかに家族の絆に大きな役割を果たすかの悲しい証明としてドラブルは棕櫚の木の夢をポールに見させたのであろう。

愛と許しの予感、アンジェラによって見事なまでに打ち消される。ポールは母親との絆を断ち切られたままで、光の世界の住人に成り得るのであろうか。シャーリーの場合同様、ポールのその後についても何も記されていない。シャーリーの場合については家族の絆を予感させるものがあったが、ポールについては、悲観的な色調が濃いままにドラブルは筆を置いている。マルティ・カルチュアルな現代英国社会において、家族の絆はもはやドラブルの前期の作品群が示すような、人生の動乱や不穏に対する砦⁽¹⁹⁾とは成り得ず、家族を通してのアイデンティティの確立も困難となりつつあるのだろうか。この混迷する混成社会において、ドラブルは家族を核としつつも、家族を拡大させた人間関係の結び付きを求めていく必要性を感じたのではないだろうか。血の絆が、アンジェラとポール親子に光をもたらすとの希望を抱いたアリックスを待ち受けていたものは、無力感であった。ただ閉ざされた円環をぐるぐる回っていただけで何等見出し得なかったという絶望感であった。

I haven't proved anything. I've just confirmed my own prejudices about human nature. I've been travelling around a closed circuit. A closed system. Me and my murderer together. It wasn't a theorem, it was a circuit. (NC p. 303)

アリックスの言葉に対し、リズは円環は閉ざされているのではなく、収束に向かうものであり、大切なことは円環を見極めること、歩き続けることであると主張する。あらゆる問題を解決してくれる理論を我々は求めようとするが、実はそのような一般原理など存在するはずもなく、人生は不合理なパズルのようなものであるが、ジグソー・パズルの札を一枚一枚拾い集めるように、歩みを続けることによつてのみ、円環は収束する。ここで言う円環とは、日常生活を意味し、何気ない家族の日常生活に如何に人は慰められているか、そして、そのような家族の結び付きを核にして人と人の結び付きも広がっていくものであることに、我々はもっと気付くべきであろう。

今日の混沌とした社会情勢のもとで、我々は家族をはじめとする人間関係をどのようにして修復させていくのか、社会の激変は、個人の人間関係にいかなる影響を及ぼすのか、なぜなら社会を抜きにして、我々個人も存在し得ないからである。これらの問題を解決していくためには、我々がグローバルな視点を獲得しうるかどうか重要となる。そして、それこそが我々の時代に課された問題であり、また、ドラブル自身の三部作を通じてのメッセージともなっている。激動の80年代は、家族をはじめとする人間関係および社会に大きな影響を与えつつある、しかも悲観的な影響を。*A Natural Curiosity*においても、多くの人間関係の破綻が描かれている。しかし、ドラブルは希望を捨ててはいない。*The Radiant Way*, *A Natural Curiosity* 両作品の最後の部分に彼女の期待が示されている。二作品は偶然か、意図的なのか全く同じ様な場面、ともにヨーロッパでは一番美しいとされる五、六月の田園風景の中で三人の主人公たちが美しい自然を享受している場面が終わっている。色彩豊かな自然の中で、主人公たちはしみじみと語り合う。

「私達の年齢になってくれば、世の中がはっきりと見えてくるものよ」(NC p. 306)

「過去と未来を見通して、今を楽しむことができるわ」(NC p. 308)

「角を曲がり、小さな丘に登っただけでも新たな視界が開けてくるものよ」(NC p. 306)

「とにかく、イギリスはそんなに悪い国じゃないわ。私はここが好きよ。」(NC p. 308)

この三人の主人公たちの言葉は、ドラブルが辿り着いた心境でもあろう。体験すること、知恵を持つこと、そして求め続けることによって、新たな視界を我々には手に入れることができる。大切なのは努力を続ける姿勢であり、たとえ失敗したとしてもそれは名誉ある敗退である。互いに求め続け、努力を続けることによってしか、人間の絆は保たれない。そのような人間への賛歌として、ドラブルは美しい田園風景で彼女の物語を閉じているのではないであろうか。

Notes

- (1) “Margaret Drabble,” in *The Writer’s Place: Interviews on the Literary Situation in Contemporary Britain*, ed. Peter Firchow, (University of Minnesota Press, 1974), pp. 120-121
- (2) Rose, Ellen Cronan. *Critical Essays on Margaret Drabble*, (G.K. Hall & Co, 1985), p. 5
- (3) 『英国作家 マーガレット・ドラブル氏に聞く』, 朝日新聞, 3 April 1990
- (4) Kenyon, Olga. *Women Novelists Today: A Survey of English Writing in the Seventies and Eighties*, (Harvester, 1988), p. 95
- (5) Moran, Mary Hurley. *Margaret Drabble: Existing Within Structures*, (Southern Illinois University, 1983), p. 62
- (6) Waugh, Patricia. *Feminine Fictions: Revisitng the Postmodern*. (Routledge, 1989), p. 128
- (7) Drabble, Margaret. *A Natural Curiosity*, (Viking, 1989), p. 96
以下、同書からの引用は本文中に、NCと頁数を以て示す。
- (8) Rose, *Critical Essays on Margaret Drabble*, p. 20
- (9) *Ibid.*, p. 41
- (10) Drabble, Margaret. *Jerusalem the Golden*. (Penguin Books, 1969), p. 60
- (11) Drabble, Margaret. “A Voyage to Cythera”, in *Mademoiselle*, (December 1967)
- (12) Waugh. *Feminine Fictions*, p. 138
- (13) Moran. *Margaret Drabble*, p. 62
- (14) Rose. *Critical Essays on Margaret Drabble*, p. 135
- (15) Moran. *Margaret Drabble*, p. 66
- (16) アト・ド・フリース著, 山下主一郎他訳, 『イメージ・シンボル事典 (*Dictionary of Symbols and Imagery*)』
(大修館, 1984), p. 481
- (17) Moran. *Margaret Drabble*, p. 66
- (18) Rose. *Critical Essays on Margaret Drabble*, p. 8
- (19) Moran. *Margaret Drabble*, p. 62